

研究紹介

琉球銀行本店から見る沖縄建築

工学科建築学コース・助教 金城 春野

沖縄がアメリカの施政権下にあった 1966 年に竣工した琉球銀行本店（2021 年 9 月現在解体工事中）についてご紹介します。ドライブスルー型窓口や書類気送管設備など当時の最先端設備がアメリカから導入され、建築構造にポストテンション式プレストレストコンクリートスラブが用いられたユニークな銀行建築です。

琉球銀行本店は、米国陸軍沖縄地区工兵隊（通称 DE）の監理の下にアメリカの設計事務所（ライアンアソシエイツ社）が設計した建築物で、地元建設会社の大城組が施工しました。この建築物からは、地元技術者らがアメリカ式の建築に果敢に挑戦し習得してきた足跡を見ることができます。導入された先進技術の一部の例を以下にご紹介します。

- ・ **ドライブスルー型窓口**：ドライブインバンキング。乗車したまま行員とマイクを介してやり取りし、滑り出てくるボックスで現金などを授受する窓口。解体前まで建物西面に現存し掲示板に代用されていた。沖縄のモータリゼーション化を象徴する機能。
- ・ **書類気送管設備**：専用のカプセルに入れた書類をチューブの中を通して各所に圧送する設備。エアーシューターともいう。琉球銀行本店では、各階に送受信所が設置され伝票などの受け渡しに使用した。
- ・ **ポストテンション式プレストレストコンクリートスラブ**：コンクリート硬化後に予め敷設していた緊張材（鋼線）を引っ張りコンクリートと固定することで床版がたわむのを防ぐ構造。琉球銀行本店には梁がない特徴がある。この技術により長スパンを床版だけで持たせ、見通しの良い広々としたロビーや執務空間を作っていた。

琉球銀行を例に見る通り、沖縄建築は、戦後から日本復帰までの 27 年間（1945 から 1972 年）、アメリカからの影響により急速に展開し、沖縄の風景を一変させました。しかし、本土復帰 50 年を迎えようとする現在、この時代を代表する建築物は、ほんのわずかしが残っていないのが現状です。


写真 1 琉球銀行本店
(2020)

写真 2 琉球銀行本店
(1968)

写真 3 ドライブスルー
型窓口


写真 4 書類気送管設備